

# 佐伯史談

第九十号

「郷土史研究」誌  
通算第百十二号

昭和四十八年九月廿七日

## 佐伯史談会

発行所 佐伯市大字箱垣宮龍護寺羽柴方

隨想

### 再遊また楽し

— 高千穂から竹田へ —

佐伯史談会

会長 高木嘉吉

八月二十六日、これは八月の最後の日曜日であつたが、義弟夫妻と私と家内と四人で、義弟の車で標記の旅をした。高千穂には昭和四十四年の三月に、史談会の主催で竹田から行つたが、四年をたつて再遊の機を得たわけである。

延岡から、五箇瀬川に沿つて高千穂に向かう。天候に恵まれてすくすくと伸んだ箱が、氣持ちよく私たちを迎送する。高千穂に向かう車が、ぞくぞくと續いて後き絶たない。前に降つた雨で、道が壊れて修理していたが、ちよつと止められると、忽ち長蛇の列が出来来る。高千穂は何の魅力があつて、これほど人が押し寄せると、ふと考へたりした。

私の高千穂はこれだ四度であるが、前の三度はいずれも熊本県から入つて、延岡に出て帰つたので、今回は逆行するわけであるが、沿道の風物に記憶のよみがえる所もあつて、心を楽しませる。

高千穂に着いて、まず高千穂神社に詣でる。祭神は、三毛入野命ほか十柱で、垂仁天皇の御代に創建されたと伝えられている。境内で最も目につくものは、源頼朝の代参島山重忠が植えたという秋父杉で、八百年の首を物語るかのやうに、社頭高くそびえている。「問わばゆ遠き、世々の跡」だが、老杉は黙して語らず、ただ深い水陰をつくつて、人々に涼さを与えるのみである。

次に高千穂峡に下つて清流と奇岩と楓樹を觀賞する。女若男女のおびた

本号内 巻

隨想 再遊また楽し(高木嘉吉) 一  
 佐藤鶴翁箱と私(佐藤鶴翁) 二  
 特別寄稿 (高倉芳男) 五  
 日向纂記と山田正徳  
 研究 龍溪天野文雄先生(山内武蔵) 七  
 佐伯城跡図解説(山内)  
 山内家新蔵図(小野英治) 九  
 証 桃井登定(佐伯)先生(羽柴弘) 三  
 研究 鶴見半島の猪垣につて (安部外吉) 三  
 研究 横川先生と佐伯(山本保) 一六  
 隨想 法燈(また消えず)(宮沢泰) 三  
 研究 宜隆侯の書翰(羽柴弘) 一四  
 平巻と報告 一五  
 一回一周バスの旅(伊賀さん) 一七  
 巻末の集會とその報告  
 集會案内(奇作お礼外) 一八

たしい観光客が群れている。今回は時間制限をうけることもないので、ゆつくり散歩する。かなり上流まで行つて見たが、懸崖から落下する滝が所々にあって、錦上さらさら花を添える。清流を上下するボートも、秘境に新風を送るものとして、画幅の中の一点景である。茶屋で昼食をとつて、天岩戸に向かう。

天岩戸神社は、曾達の記憶のままであつたが、今まで見落していた天岩戸神社と仰慕窟を見学したことは、今度の旅の新しい収穫であつた。それから天岩戸神社で、ある観光団の注文で、岩戸神楽が奉納されていたので、観光客にまじつて拝観した。かぬがぬ見たいと思つていた岩戸神楽を、こらして見ることを得て、その一端を知り得たことを喜んだ。男神と女神が契りを結ぶ場面など、よく機微きうがへて、見る者をして恍惚たらしめるものがあつた。

高千穂は神話と伝説の里である。天照大神や天孫の降臨が、史実としての確証が得られないものであつても、地域の人々が伝説を語りつぎ、それにもとづく史蹟を顕彰して、高千穂の峡谷美に、深い歴史の彩りを添えていくことは、それでよいのではあるまいか。高千穂は自然の美しさと、日本民族発祥のふるさととのミックスされたところだ。観光地としての魅力と生命があるわけである。

帰途は同じ道を引返すのも退屈だらうから、竹田に出て帰ろうということになった。これは私の提案で、私としては四年前の竹田から高千穂への旅の印象に捨て難いものがあるので、もう一度その道を通つて見たいと思つて、相談をリードしたのである。

車は上野・河内と進んで、五ヶ所高原に出た。展望台はウエストン碑も、四年前と変りななかつた。

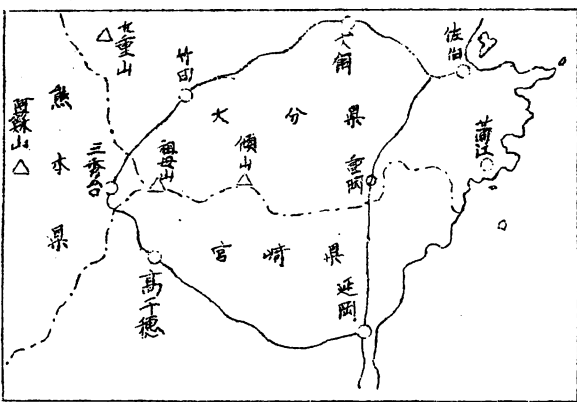
東に仰ぎ見る祖母山は、千古不変のたれずまいで、「登つてみないか」と招いていよう。さらに西に阿蘇、北に九重が見まされて、「三秀台」の名に恥じないものである。高千穂から五ヶ所まで、阿蘇外輪山を東斜面を登るわけであるが、道が速くてしかも荒れて悪かつたことは初めて逆る義勇に気が毒であつた。

それから道は外輪山を越えて熊本県に入り、更に外輪山を越えて大分県に入る。このあたり緑々高原は久煙まられて、祖母山麓は、九州の秘境なるかなの感が深かつた。

竹田市に入つて、二俣・九重野・妙見とだんだん人里に接するようになる。この高原をかき走り、すてつと玉来に着いた。すてつに日が傾いて、扇森稲荷に参詣した時は、境内には陽かげは全くなかつた。

高千穂から竹田まで、道程が長く道が悪くて、なやみやせられる場面もあつた。四年前の高千穂行には、バスにすかして香気に通つた道であるが、再遊して認識を改めたわけである。

入田のマスウの養殖場で夕食をとろうと思つてい



だが、入田への道が道路工事中で、迂回せねばならないと聞いて、あきらめて帰途についた。

竹田一犬飼間は、鎧装も完了して、車は快く走る。しかし犬飼に着いた時は、暮色ようやくせまって、長い夏の日も暮れかける。

こうして九時前に無事帰宅した。強行軍であつたが有意義で、楽しい一日であつた。

私は近來人にすすめ、自分でしようと思つてゐる。それは再遊のことである。二回目は二回目であり、三遊、四遊また可なりである。

今回の旅は、前回と反対に巡つた関係もあるが、前回の印象を訂正し、前回見落したことを、改めて認識したことが多かつた。

しかし高千穂下について言えは、餌見が丘、高天原、高千穂陣などをまた見ていない。これで日何回行つても見落しが出まそうである。

再遊を念じ、再遊をすすめる所以である。(おわり)

(明・三三) ◇豊国史談(期三五) ◇豊後史蹟考(期三八)

◇大分県会史編纂(期三九) ◇豊国小史(期四〇) ◇大分県新村沿革史(期四一) ◇佐伯志脱稿(期四二) ◇馬城峯

拳兵史記(期四三) ◇別府新史(大正元) ◇松平忠直謫居録(大正元) ◇宇佐神宮記(大正四) ◇大分県管内全史(大正五)

◇宇月郷史(大正六) ◇臼井新史(大正六) ◇大分県警察官遺難殉職記(大正九) ◇南海郡郡史(大正一〇年) ◇根島史(大正一〇) ◇西国東郡史(大正一二) ◇大分

県被贈位者小伝(大正十四) (以上)

随想

佐藤鶴谷(翁)と私

会員 佐 脇 貫 一

私が鶴谷翁を訪れて、佐伯の話を聞き、郷土史に興味を持つようになったのは、昭和のはじめであつた。そのころ先夫人おこと小母さんと亡くされ、私は翁に独り住まい、淋しさを酒と著述でまぎらしていた。

それだけに、若い私の訪れを喜び、私を相手に、翁は冷たい佐伯人の態度を非難したが、また矢野龍溪や藤田鳴鶴が佐伯人などのように扱われたか、明治・大正の政界人と佐伯の関係など、体験を通じて知つた佐伯人根性と時代相を、つぶさに話してくれた。

私が最初に翁を訪れたとき、翁は手許におつた漢籍ととりあげ、はじめ、夏をめぐつて讀んで見よといつた。それと益子で、深恵王篇であつたから、私は躊躇なく読むことができたが、翁は笑いながら学習と文章について語り、文学青年を以て任じていた私を啓発してくれた。

ある日翁を訪れた私は、机の上の薄い冊子がひらげてあるのを見た。「先生何ですか」というと、「うんお為半蔵の口説だよ。知つてゐる古老が死んでしまつて、元の形がわからないのじゆ」と答えたが、やがて机を引出しから白扇をとり出すと、筆に墨をふくませて、在天連理枝、在地比翼鳥々と横書きし私にくれたが、しばらく眼目して「ああ婆さんが生きていたらなあ」とつぶやいた。見ると翁は目に涙をたたえ、一入淋しそつな様子であつた。

おまち小母さんが佐藤家に入ったのはそれから間もなく